

未來の抱負を談じた。彼はあの獨特な句調で將來を語り又、學問を論じ時のたつのも忘れて數時間語り合つた。翌朝は一点の雲もない上天氣で、眩く光る雪景色の町を晴れ々とした氣分で雪を踏みつゝ驛迄歩き、再會を約束して別れたのであつた。此れが私にとつては最後の思ひ出となつてしまつた。かうした良友を失つた事は痛惜にたへない、併し故人の意志は我等同期生が継がう。桑山君の靈に冥福多からん事を祈る。

桑山君との二時間の思ひ出

同期生(東京) 西 幸保

入学以來四年間の課程を終り卒業を祝うグラスの虹と共に各々の成功を祈つて別れた。其の後昨年八月、僕の寺の手不日から桑山君にもし都合がよければ年内だけでも手伝つて欲しいと手紙を出し、桑山君から返事があり八月末に澁谷であふ事になつた。その時は僕の方が先であつた。やがて彼と會ひ色々話をし乍ら澁谷駅地下の日本食堂に入りビールをのみ乍ら話あつた。桑山君は自分も教員として就職したと思ひ、その手續きをとつたがこれと云つて現在就職先があるわけではないとの事であつた。そこで僕の寺の事情を話し、もし都合ついたらすこしの間でもいいから手伝つて欲しい事を告げると、心よく承知して呉れた。そこで重ねて桑山君にもし突然に就職先が極つたらその時は僕の家の都合なんかは氣にする事なく歸つて呉れて結好だと話をした。丁度午後三時頃であつたが、それから映画をみやうと云つたが彼はえらく遠慮をしていたが無理に一緒に映画をみた。そこを出て喫茶店でコーヒーをのみ又色々よくお願ひをし、暮れゆく澁谷驛で別れた。かうして二時間彼と共に過した。

その後手紙で二回位連絡をとり九月六日午後七時五分の上野發青森行の急行で出發して貰ふ事になつた。その日は上野驛へ彼を見送りに行き、向ふでの事を色々話し室蘭は横須賀とは氣候も違ふし町の様子も話して呉々も氣をつけて旅行される様頼んで別れた。

秋の空には早くも夕闇が迫り晴れた空には、夕映えがてりはえ上野の山は一段と美しく秋を思はせる夕方であつた。今にして考えると、上野驛で桑山君を送つたのが最後の談笑にならうとは、全く神ならぬ身の知るよしもなかつた。彼との在學中での思ひ出は澤山ある。然し僕はそれらの事よりも今腦裡にあるものはビールをのみながらの二時間である。桑山君は其の時何を考へてゐたか、前途の人生航路の計画であつたか、旅のつれづれの楽しみであつたか、はたまた幼少の、大學の、本山での、思ひ出であつたらうか。それを思う時澁谷での二時間が繪卷物の様に目がしらをかすめていく。

ありし日の和尚様

同期生(東京) 安本利正

北の海に儂なく散れる身なれども今蓮華座に微笑みてあらむ。曾ての良晃和尚を回想し乍ら今浄土界にあるを想ふと、斯様な姿が目に見えて来る程、和尚様は善良質朴な人柄であつた(桑山君、再び君を和尚様と呼ばせてくれ給へ、君の愛稱でもあつた程私達には親しみ深い呼び名であれば)私との交友は五ヶ年計りであつたが、親しく往來させて頂いた。彼は今後の佛教に非常な關心を抱いて度々論じた。自分の意見を繰返し述べ、どうかして人を納得させねば氣がすまないと云ふ氣質の人であつた。私の分らない處は細微に渡つて説明してくれ、何時迄も話が盡きずに夜明けを迎へた事も

あつた。然し議論が深くなればなる程二人の意見は衝突した。これは互ひに異なる性格の然らしめる所であつたが、その爲共に得る所は大きかつた。かうした二人の内にも全く共通した点、本屋を歩く事と地方の遺蹟を見物する事は、和尚様と私との交友の不可缺の要素であり二人が結ばれた端緒もこゝに所以するものかも知れない。二人は毎週一度位は共に本を求めて歩き廻つた。又互ひに打合せをしては各地の遺蹟を歩いた。日帰りの時もあり二、三日掛りの時もあった。埼玉群馬や神奈川静岡等、或る時は横穴古墳へ潜り込んだり、或る時は古社寺を見、又古い墓石を探したり、疲れを忘れて幾たびか、日の暮れた見知らぬ野道を彷徨つた事もあつた。

こうして共に汗を流して歩いた想ひ出はいまも鮮かに彷彿としてくる。卒業後も、時々私の家へ来て話を交へたが、多くは手紙で往來した。来る手紙毎に御無沙汰を謝すと書いてあつた。然し月に二三遍は必ずと云つてよい程送られて來た。時には續けて三通も來た事もあつた。その返事は私こそよく御無沙汰してしまつた。それらには色々な通信文と共に研究書の照會や本の注文などが書いてある事が度々あり、又難しい研究問題等を書いて意見を求められたりして、専門の異なる私は散々悩まされた事もあつた。旅先で多忙の毎日送つてゐる時にも常に學問向上の諸問題を考へてゐる和尚様には私も新たため驚かされてしまつた。私の受取つた最後の手紙にも「佛敎汎論二卷を求め置き下され」と書かれて居た。その手紙は非常な長文で四百字詰にしたら二十枚近い程あり小さな字できれいに清書されて居た。私はあんなに長い手紙を貰つたのは始めてであつた。又その手紙に「西乗寺の裏の貝塚より土器片を掘り出しました。持ち帰つて差上げますから御受取下さい」と書いてあつた。土器は

和尚様と共に海に沈み、やがて引き上げられて、私の手許へ届いた。碎けては了つたが有難い形見である。

先輩としての桑山さん

史學會委員 三木 太郎

「私の考えは玉村先生の御意見と違ふんです！」研究室では頭を丸めた小柄な一見平凡そうどこか飄逸とした先輩が熱辯をふるつていた。桑山さんだつた。その頃の不勉強の私には自分の意見を臆せず堂々と教師の前で述べるなど、まして異論を挟むというに至つては夢想だにもなしえなかつた。その後幾度か、先生方と膝を付合せて眞摯に談じている桑山さんの姿を教場や研究室において見うけた。孜々として弛まない研學の姿に、同じ歴史科の學生として自らの無力に恐懼した私は前途に不安を覚えたほどだつた。黯然とした日々を送つていた或る日、桑山さんが色々話しかけてくれた。學識をたかぶらない同等の者に話し合うように問題を呈示してくれる桑山さんに、しどろもどろの拙い意見を披陳したとき、その淺學を決して蔑視することなく熱心に耳を傾けてくれた。先輩というより良き友として接してくれた桑山さんに、いつか卑下した暗愚の心は消え去り、希望を持つて共に學べるようになった。親密の度は學問だけでなく、人と人との交わりに及び、甘えて先輩に對する禮を缺いたことも屢々あつたことであろう。桑山さんは無禮をとがめはしなかつた。良い方だつた。屹度今も、生涯學問に身をゆだねた桑山さんの事だから、幽冥境で眞摯に學べていられることだろう。安らかであれかしと冥福を祈りつゝ筆を擱く。

友去りし衆生濟度の慈悲とてか哀れにもにて愛カナしきものぞ